

苔より桜

——西芳寺における夢窓疎石と禪宗——

モリー・ヴァラー

はじめに

鎌倉時代から南北朝時代にかけての乱世に活躍した夢窓疎石（一二七五—一三五一）は、臨済宗の代表的な禅僧である。彼は北条家、後醍醐天皇、足利尊氏・直義など、皇族や武家と親密な関係を持ち、五山制度の形成にも大きく貢献した。やがて政治、芸術、宗教の垣根を超えて多彩な才能を発揮することになる彼は、その前半生において、人里を離れて一人坐禅に励み、三十一歳で開悟してから五十歳まで、数多くの地方寺院の住職を勤めた。後半生になると、天皇、武士、公家などの手厚い保護の下、南禅寺などの名刹の住職に任じられ、新寺院の開山として弟子の育成にも力を入れた。また、夢窓は語録や仮名法語、漢詩や和歌を残し、都鄙を問わず、多数の寺院の造営やその庭園に関与した。本稿でとりあげる西芳寺

も、一般的には夢窓が中興の祖とされている。

本稿では、夢窓自身の作品や関連資料に基づき、西芳寺に禪宗が移植される過程を明らかにすることで、中世中期の禪宗における象徴的景観のあり様を探ることを目的とする。まずはその過程における象徴として、「桜」の意味に着目することから始めたい。

一 苔寺から花寺へ遡る

近代以降、「苔寺」と愛称されるようになる西芳寺の正門をくぐり、境内に入ると、見渡す限り、鮮やかな緑色の苔のカーペットが敷きつめられている。黄金池と呼ばれる大きな池の後ろに聳える「洪隠山」を少々上ると、かの有名な枯滝の石組みが目の前に現れてくる。

この名庭を誰が手がけたのかについては、長年の議論にもかかわ

らず、依然として決着を見ていない。特に、その著名な枯山水の石組みの作者は不明のままであり、夢窓以前の鎌倉時代に既に完成していたという説や、江戸時代に完成したと主張する説もある¹⁾。

高橋桃子氏が指摘したように、西芳寺に関する文献からは、中世あるいは江戸時代以前に枯山水の滝石組が存在したかどうかを確認することはできない。高橋氏の研究によると、滝石組があったとしても、中世の西芳寺は枯山水というより、池泉回遊式庭園と見做されていたらしく、池や桜、紅葉で有名であった。高橋氏は中世における西芳寺の庭園鑑賞のあり方を把握するために、洞院公賢（一二九一—一三六〇）の漢文日記『園太暦』（二三二—一三六〇）などの史料を検討し、天皇家と公家、武家、そして僧侶による庭園の利用について個別に詳しく述べている。同氏は、禅寺である西芳寺では、舟遊び、音楽、花見、紅葉狩などが楽しまれ、足利義満（一三五八—一四〇八）以前には、来客が坐禅を組んだという記述は見当たらないとした²⁾。

これによれば、中世の西芳寺は、座禅の道場というよりも、むしろ遊技場であったというべきかもしれない。しかし、中世の西芳寺に欠かせない特徴として描かれた「桜」に注目すれば、西芳寺の花見は、単なる遊びにとどまらないものであったこともわかる。以下、夢窓に関する史料をもとに、西芳寺における「桜」の象徴的な意味に焦点を当てて論述を進める。ごく簡潔ではあるが、日記の中

の「遊戯」を仏教文献の記述に改めて照らし合わせることで、「桜」の意義、「桜」の担う重要な役割が明らかになってくるのである。

二 『西芳精舎縁起』に現れる聖なる花

夢窓と西芳寺との関わりを理解するためには、本論文で使用する資料のうち、最も時代が下るものだが、同寺院の半ば伝説化された浩瀚な寺史を吟味する必要がある。なかでも、夢窓入滅後、西芳寺住職を務めた中章急深（生没未詳）によつて著された『西芳精舎縁起』（一四〇〇³⁾）が最も貴重な史料であろう。同史料には、夢窓と西芳寺との関係のみならず、桜についても詳述され、桜が西芳寺の伝説において特別な位置を占める存在として描かれている。桜と西芳寺との関係を浮き彫りにするために、まず、この『縁起』に語られる西芳寺の由来を見ておく。

『縁起』によると、西芳寺は元来、聖徳太子（五七四—六二二）の別荘地であった。その妙地に、清冽な水をたたえた池が湧き、太子が最初に訪問した折、阿弥陀如来が出現したという。太子はその尊様を刻み、それを七宝の塔に安置した。すると、天照大神、ついで万の諸神が現れた。この出来事は同地の聖性を証明している。また、日照りの時、宝塔に収めた宝珠を以て雨を降らせることができたと報恩として、聖徳太子は放生会を開いたが、それが日本最初の放生会であると『縁起』は指摘する。

百年後、行基（六六八―七四九）によってその場所に伽藍が建立され、西方にある阿弥陀如来の極楽浄土を思い浮かべることができるよう、「西方寺」と名づけられた。

さらに数百年後、同寺は荒廃していたが、当時摂州の太守であった中原師員（二八五―一二五二）が法然（一一三三―一二二二）に依頼し、同寺院が再興された。ここに、法然が第五興の開山となり、同寺は念仏の道場となったが、その後、再び荒廃してしまった。そして、暦応二年（一三三九）、檀那で摂州の掃部頭であった藤原親秀（生没未詳）の要請を受けた夢窓は、中興開山として、西方寺を禅宗寺院に改めた。武家はこの事業に領地を寄付し、夢窓の下で、新しい建物が次々と建設され、とりわけ地藏菩薩の援助で寺院の庭が新しく作られたという。このとき、禅宗の始祖である達磨（生没未詳）が西方からやって来た故事にちなみ、禅宗の繁栄とも関連付けた上で、西方寺は「西芳寺」と改名された。

『縁起』には、目まぐるしく変動を遂げた西芳寺の歴史・伝説が右記のごとく描写されている。しかし、このような移り変わりにもかわらず、以下に述べるように、一貫して皇室や武家との関連、そして仏法が強調されている。そして、そこには、もとを辿れば、ほかでもない西芳寺の名高い桜が関係していると考えられるのである。

『縁起』では、この伝説の桜は、真如親王（俗名高岳親王、七九九

―一八六五頃）と共に初めて登場する。中世の文献に広く見られる伝説に、真如親王が空海の弟子として、天竺へ求法の旅に出かけ、道中で亡くなるというものがある。『縁起』ではこの伝説への言及もあり、真如が熱心な仏教の信仰者であったと描かれている。『縁起』によると、真如は西方寺で草庵を結び、長年、境内で修行した。ある時、坂上田村麻呂（七五八―八一二）が宮廷の桜の枝を西方寺まで持っていく。周知の通り、田村麻呂は七九一年から蝦夷征討に参加し、七九七年には日本最初の征夷大將軍に任じられた人物であるが、彼はまた『縁起』に登場する最初の武者でもある。

大臣田村磨禁庭の桜を折来りて観念の窓に捧げられければ、親王其一枝をとりて、池の水にひたし庭上にさしはさみ誓ひていはく、我もとむる所の法もしよく成就し、此寺末の世に至りて賢聖同じく出て妙法をときたまはば、日を経なして根ふかくし花を生ぜよ。もししからずば、たち所に枯よと有しに、持念の御心ふかきにや、幾程なくねさし枝葉さかへて、又の春花さきしころ、親王和歌を詠じたまふ

桜花咲けばちるとぞしればこそ後のすへ葉をはやみせに
れ⁴

右のように、坂上田村麻呂が宮廷に植えられた桜を以て西方寺と皇族とを結び付けたという物語は、『縁起』に頻繁に見られる。さらに、真如の和歌を見ると、花の成長を仏法の興隆と直接に関連させていることがわかる。『縁起』では、この田村麻呂による西方寺参拝が、皇室・武者・仏法という三者の結び付きをさらに強固なものにしていくさまが描かれる。彼の二回目の訪問は冬であり、田村麻呂は天皇の勅使として再度真如に拜謁した。その際の寺の趣深いさまを田村麻呂から奏上され、嵯峨天皇（七八六―八四二）は、翌春、桜が満開に咲き誇る中、西方寺へ行幸する。この機に及んで、田村麻呂を媒介にして、西方寺と皇室とがしっかりと結び付くのである。

また、仏法を求め、天竺への途上で亡くなる真如親王の植えた桜が、西芳寺の伝説の中で長く咲き続けているとも『縁起』は語る。

親王渡天の後、幾とせをへて彼桜大樹となり、むかしかはらぬ
花の春、風ふきつたへ跡とふ人のこととさに、弥生二十日あま
り五日を桜見の放生といひ習ひしも、今はむかしとなりぬ⁵

ここでは、桜が、時代を遡って皇室と深く関係していたことが明らかである上に、放生会とも組み合わせられることで、その聖性をも垣間見せている点に注目する必要がある。

『縁起』では、真如の時代以降の記述においてもなお西芳寺における真如親王と桜の関わりについての言及が繰り返されている。その中で、桜を植えた真如と後世の武士との交わりまでもが物語られるのである。一例として、北条時頼（一二二七―一二六三）が西方寺を訪ねた逸話を見てみよう。周知のように、北条時頼は鎌倉幕府第五代執権であり、宋から渡来した臨済宗の僧侶である蘭溪道隆（一二二三―一二七八）に帰依し、禅宗を手厚く保護した。『縁起』は時頼と禅宗との関わりには言及していないが、彼が日本国中を旅して廻ったという伝説を取り上げ、その際の西方寺への訪問についても詳述している。

正嘉年中「一二五七―一二五九」時頼入道廻国の頃、此所に庵をむすび桜堂と名付けて住しける。花のさかりに、

むかしすめるあるじの法のことの葉ははなの中にや残しを
きける

と詠じて、親王の御影に手向法施などして心もすめる。其夜の夢に親王まみへたまひて、善哉、汝爰に來りて我遺愛の花を詠め、むかしをしのぶ事、我法の道をとく天竺に求めんと心ざし、流沙を渡る、羅越国といふにいたりてつひに身を失ひ、又

此国に帰る事を得ずなりぬ。しかはあれ、法性の無漏土常にゆき常にかへる。遠近のへだてなく古へ今のかはりなければ、朝な夕な汝と手をとりにて此庭に遊び此花を見る。今此歌のかへしすとして、

むかしすめるあるじの法のことの葉ははなの中にぞ残しを
きける⁶⁾

時頼の和歌とほとんど同一の返歌によると、西方寺に真如が植え付けた仏法は依然として健在であり、今も咲く桜がその真如の法を象徴しているという。また、「遠近のへだてなく古へ今のかはりなければ、朝な夕な汝と手をとりにて此庭に遊び此花を見る」という箇所は、西方寺の桜の下、羅越国と日本の距離、さらには今昔の隔てが消え、そこで入道、もともとは武士である時頼が、親王である真如と一緒に遊樂しているさまを描いており、桜を媒介として、西方寺での武士と皇室との出会いが鮮やかに語られていることに注目すべきであろう。

これまで述べたように、「遊び」とは言え、『縁起』における西芳寺での花見は、単なる世俗的遊戯にとどまるものではなからう。

『縁起』を詳しく検討すると、その「遊び」は、儀式的、あるいは修行的な意義をも持つと考えられるのである。これまでみてきた真

如と時頼の逸話においても、真如が「法性の無漏土常にゆき常にかへる」境地に至ったからこそ、時頼との花の下での戯れが可能になったといえる。西芳寺での遊戯には、仏教的な意味が示唆されているのである。

また、西芳寺の桜は、儀礼の道具として登場する場合もある。

『縁起』によると、清涼寺の御身拭に、西芳寺の「池の水を汲み器に桜の花をえがかせ奉られぬ」とあって、これは桜の聖性が法事の中に応用された例といえる。⁷⁾

さて、以上の記述を踏まえて、夢窓以降の西芳寺における「遊び」の描写に着目してみると、さらに強い仏教的な意味合いを読みとれるのである。

国師天性仮山水のおもむきを得て、湯々洲崎其よろしき所にしがひて佛閣僧舎を建、又其あいだ奇岩怪樹の有様世に九山八海をうつしたまふといひ伝へしもかかる事になむ。されば国師の御心、ここに遊観する輩とおのおの其根器に随ひ、或は当來をまたず、したしく安養浄土に遊化し、あるひは立所をはなれず直に本地の風光をあふがしめむと⁸⁾

以下は省略するが、この後、夢窓の禪文書と深い関連のある名を持つ池や樹木、座禅堂などが列挙され、改めて「みな禅観行樂の地

なり」と締めくくられている。このように、『縁起』では、夢窓の再興によって、もともと存在していた花見の聖なる側面が、初めて禅宗の思想と重ねられたのである。こうして、かつては「安養浄土」を象徴した庭園を観覧する人がそこで自由に遊樂することが可能となったほか、あるいはそのまま速やかに己が心の本来の姿に對面する契機さえ訪れたのである。つまり、夢窓以降の西芳寺はもとの浄土との連想を保ちながら、禅宗的な頓悟という再解釈を得、境内での遊戯に修行上の意味を付け加えた。これによって、西芳寺では、禅觀と行樂が同時に行われるようになったといえよう。

三 未来へと繋がる、散り行く『正覚国師和歌集』の桜

夢窓の歌集である『正覚国師和歌集』（二六九九）⁹にも、西芳寺の桜に関する和歌は少なくなく、『縁起』とある程度同一のモチーフが見られる。一例を挙げれば、真如親王のことを詠んだと推測できる和歌が一首ある。詞書などの説明がないので、真如親王かどうかはつきりしないものの、次の歌は、彼を彷彿させるに十分である。

この庭の花見るたびにうゑおきしむかしの人のなさをぞ
しる¹⁰

これ自体は懐古の歌であるが、『国師和歌集』は全体として、ひたすら昔の日々を懐かしむだけではなく、むしろ将来を視野に入れたものであるとみられる。一二二首で構成される『国師和歌集』には、夢窓が大事にしていた場所や、彼の後援者、そして弟子たちが次々と登場する。歌の内容は様々で、孤独を讃嘆するものから、教育の手段として弟子との間にやりとりされたものもある。歌集の半分は季節の歌で、伝統に従い、四季の移ろいになぞらえて構成されている。そして、季節の歌の中の三十八首は春の歌であり、そのうち二十八首が西芳寺の桜を主題としている。

『国師和歌集』に収載されている桜の歌は、晩年の夢窓の優先事項を反映しており、世の中の泰平を祝福し、後述するが、天皇の長寿を願ったものが散見される。まず、前者から考察すると、同和歌集には、夢窓の後援者である足利幕府つまり初代將軍足利尊氏（一三〇五—一三五八）とその弟の足利直義（一二三〇—一三五二）への賞賛が度々詠み込まれている。

征夷將軍尊氏、西芳寺の花のさかりにおはして、法談之後歌よ
みける次に、

心ある人のとひくるけふのみぞあたらさくらの科をわする¹¹

武衛將軍禪閣惠源¹²、花の比西芳寺に來臨の時、人人歌よみける次に、

ながらへて世にすむかひもありけりと花みる春ぞおもひし
らるる¹³

征夷將軍同春來臨の時¹⁴

山かげにさく花までもこのはるは世ののどかなる色ぞ見え
ける¹⁵

当時の政治情勢からすると、尊氏と直義との関係は悪化しており、それを考えると、「世ののどかなる色」とはとても言えないはずである。さらに、観応の擾乱のピークと思われる一三五一年に、尊氏、直義、それから尊氏の息子で後継者の義詮（一三三〇—一三六七）が花の頃に西芳寺を訪れ、その際夢窓は再度、以下のように詠んでいる。

観応三年三月廿一日、左武衛將軍禪閣并相公羽林同道して來臨、法談後、庭前花下にて人人歌よみける次に¹⁷

をさまれる世ともしらでやこのはるも花にあらしのをき
みすらん¹⁹

この僅か二ヶ月前に、打出浜の戦いで尊氏は直義に降参し、夢窓が求めた一時的な和解によって、このとき兄弟揃って西芳寺参拝を行ったのである。しかし、夢窓が亡くなってから半年もしないうちに、尊氏と直義は紛争を再開、一三五二年二月二十六日、鎌倉で直義が死亡した。兄の尊氏によって毒殺されたのではないかと言われている。このように、西芳寺の桜の下で見られた両者の友好と融和は永く続かなかつたが、夢窓が生前、いかにこの和解の実現に力を尽くしたかが右の歌には暗示されているのではないか。右の二首は、西芳寺の桜の姿をそれぞれ描いているが、そのいずれにも、夢窓の和解を祈る気持ちが反映していると考えてよいであろう。前者は山かげに咲く落ちついた桜の姿が平和を象徴し、一方、後者は花びらが吹き散らされる様子を詠みながら、それを通して逆に世の中の泰平ぶりを浮き彫りにしている。激しい政治的な移り変わりの中で、同年の秋に他界することになる夢窓は、足利兄弟の関係だけではなく、自らの宗派の未来も心配していたと考えられる。西芳寺で詠まれた数首の歌が、同寺の将来の繁栄を願い、それを祈念している要因はここにあるであろう。

『国師和歌集』には、『縁起』のごとく、皇室との結びつきを改め

て確認する傾向も見受けられる。特に、西芳寺と皇室との交流の将来を占う機会である御幸の際に詠まれた作品には、夢窓自身の高齢を嘆く歌が多く登場する。言うまでもなく、老衰や散る花への悲しみは、和歌によく用いられる一般的なモチーフであるが、『国師和歌集』の場合、そこに夢窓死後の西芳寺の将来が鋭く認識されていると考える。この傾向は御幸の年に詠まれた歌にもっとも著しいが、次の歌とその返歌は、御幸と夢窓の高齢との関連性を窺い知ることができ重要な事例である。

花のさかりに西芳寺に御幸なるべしときこえけるが、うちつづき御さしあひありてのびゆきけるほどに、花のちりけるを見たまひて²⁰

なほもまた千とせのはるのあればとやみゆきもまたで花のちるらむ²¹

西芳精舎に御幸なりて、両株の佳花、叡覧ありける翌日にたてまつられける

竹林院内大臣²²

めづらしき君がみゆきをまつかせにちらぬさくらの色を見

るかな

「夢窓の」御かへし

花ゆゑのみゆきにあへる老が身に千とせの春を猶もまつかな²³

最初の歌では、天皇が今年の桜を見る機会を逃してしまっても、それを嘆く必要はない、千年もの御幸が期待できると、巧みに詠っている。むろん、夢窓自身が千年後まで生き続けるわけではないが、この歌からは遙か遠い将来まで御幸がずっと続いて欲しいという願いがはっきり読み取れる。また、竹林院内大臣への返歌では、夢窓の「老が身」と「千とせの春」が対比されている。その切迫した死の必然性にもかかわらず、千歳の春の御幸を期待しているのであろうか。

和歌の伝統に従い、御幸に関する夢窓の和歌はしばしば天皇の長命、あるいは皇室の久遠を祈る。それゆえ、関連する十首のうち、先の例で見たように、「千とせの春」という表現が三回、「千代の御幸」という同様の語句が一回用いられている。こうした表現は、ただ天皇や皇室を祝福するだけではなく、夢窓死去の後も、西芳寺が皇室からの手厚い保護をそのまま維持して欲しいとの願いを示唆し

ているといえる。また、夢窓の老衰と今昔の桜の鮮やかさを対比する次の歌にも注目したい。

さく花はいまもむかしのいろなるにわが身ばかりぞおいか
はりぬる⁽²⁴⁾

この歌は言うまでもなく、『伊勢物語』第四段または『古今和歌集』巻十五・恋歌五に出てくる在原業平の春の月についての著名な歌を連想させる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にし
て⁽²⁵⁾

周知の通り、この業平の和歌からは、自然とともにある恋愛の移り変わりに対して、歌人自身の不変性が読み取れる。一方、夢窓の和歌では逆に、和歌の約束事に反して、桜の花が無常の象徴ではなく、夢窓死去後の変わらぬ西芳寺を祝福しているといえよう。その上、はつきり文字にされている訳ではないが、真如親王の昔に思いを馳せた可能性もあるように考える。

また、桜の盛りに西芳寺で読まれた最後の二首にも、夢窓の老衰が詠まれている。

又もこん春をたのまぬ老が身を花もあはれとおもはざらめ
や⁽²⁶⁾

行すゑの春をもひとはたのむらん花のわかれば老ぞかなし
き⁽²⁷⁾

『縁起』では、真如親王の早すぎる世界に対して、西芳寺の桜が永久に咲き続けて欲しいとの願いが読み取れたと思う。また、『国師和歌集』に現れる桜も、西芳寺や自派の将来を案じつつ、死期が迫っている夢窓に対比して、西芳寺の永遠性への祈りを象徴しているのである。さらに、西芳寺の桜を詠んだ『国師和歌集』所収の最後の歌には、夢窓の死去について「今年（二三五二）九月晦日巳刻入滅し給けり」と注記されている。ここで夢窓の死と、散る桜とが関連づけられていると言うまでもない。その次の歌は夏の部に移るが、それは時の流れを示すと同時に、夢窓の生死にかかわらず、次の春が必ず来ることをも表現しているのではないだろうか。

四 夢窓の『年譜』に現れる西来の桜

前節までは、西芳寺において桜が大きな存在感を持っていたことを確認してきた。本節では、夢窓の甥で弟子でもある春屋妙葩（一三一一—一三八八）によって夢窓没後に書かれ、『縁起』にも数箇所

引用されている『天竜開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』（一三五三）²⁸をとおして、桜がどのように捉えられていたかを検討する。妙葩の『年譜』には夢窓の生涯および活動がもつとも詳細に述べられているほか、西芳寺という場において禅宗が日本の風土に根を下ろした経緯や、西芳寺が禅宗史に占める地位についても認識しうる。なお『縁起』と同様、ここにも行基及び真如親王が登場する。

夏四月革西方教院作禪院。此寺聖武天皇天平中有_二釈行基者_一。民間称曰_二菩薩_一。孩時人得_二之於鷹巢_一也。力化_二寰中_一。营建_二佛寺_一。凡四十九所。今之西方其一也。後百年平城天皇太子弃_二儲宮_一。為_二沙門_一。天皇封為_二真如親王_一。居_二之_一久。又弃而往_二唐_一。度_二流沙_一。至_二羅越国_一而薨。爾來五百年。凡庸相繼而住。寺廢甚。檀越藤親秀厚_レ礼勤請。師忻然曰。吾素慕_二亮座主之風_一。而今得_二西山_一。居_レ焉不_二亦善_一乎。輒改_二西方旧名_一。為_二西芳精舍_一。揭_レ額。蓋取_二祖師西來五葉聯芳之義_一也。仏殿本安_二無量寿仏像_一。今以_二西來堂_一扁焉。堂前旧有_二大桜花樹_一。春時花敷稠密殊妙。為_二洛陽奇観_一也。²⁹

右記のように、ここでは桜が西芳寺の名物として取り上げられているが、そののみならず、桜こそ、西芳寺が禅宗に改宗する上で象徴的な役割を果たしたと想像できる。すなわち、『年譜』は夢窓の

師祖である仏光国師（無学祖元、一二二六―一二八六）が桜を題材として詠んだ詩を引用し、それが後世の西芳寺の景観に対する予言であったとしているのである。

昔仏光師翁題_二桜花_一偈云。満樹高低爛熳紅。飄飄両袖是春風。現成一段西來意。

一片西飛一片東。何_二其冥符此境_一之如_レ此似_二乎_一識記也。³⁰

『仏光国師語録』を確認すると、確かに、同じ詩が偈頌の「題桜花」として収められている。³¹この詩を思い出しながら、夢窓が桜の前にある堂を「西來堂」と改名したのであると『年譜』は語る。この新しい名前を、夢窓は師祖の仏光、そして仏光の詩の背後に隠れた達磨とも関連づけるのである。『景德伝灯録』（一〇〇四）第三卷所収の有名な逸話では、禅宗始祖として崇拜されている菩提達磨が、二祖慧可に印可（四八七―五九三）を与えて禅宗の法灯を開始し、蓮華の比喻を以て、そののち禅宗が自ずから広大に流布することを予言している。

乃願_二慧可_一而告_レ之曰、昔如来以_二正法眼_一付_二迦葉大士_一、展転囑累而至_二於我_一、我今付_レ汝、汝当_二護持_一。并授_二汝袈裟_一。以為_二法信_一、各有_二所_一表宜可_レ知_二矣_一、可曰、請師指陳、師曰、内伝_二法

印_一以契_二証心_一、外付_二袈裟_一、以定_二宗旨_一、後代澆薄疑慮競生、云吾西天之人言_二汝此方之子_一、憑_レ何得_レ法_一以_レ何証_レ之、汝今受_二此衣法_一、却後難生但出_二此衣并吾法偈_一、用以表明其化無礙。至_二吾滅後二百年_一衣止不_レ伝_レ法周_二沙界_一、明道者多、行道者少、説理者多、通理者少、潜符密証千万有余、汝当_二闡揚勿_レ輕_二未悟_一、一念迴_レ機便同_二本得_一、聽_二吾偈_一曰、

吾本来茲土 伝_レ法救_二迷情_一

一華開_二五葉_一 結果自然成

吾有_二楞伽經四卷_一、亦用付_二汝_一、即是如來心地要門、令_二諸衆生開示悟入_一、吾自_レ到_レ此凡五度中_レ毒、我常自出而試_レ之、置_レ石石裂、縁_レ吾本離_二南印_一来_二此東土_一、見_二赤峯神州有_二大乘氣象_一、遂踰_レ海越_レ漠為_レ法求_レ人、際会未_レ諧如_レ愚若_レ訥、今得_レ汝伝_二授吾意_一已終_③

この逸話から分かるように、達磨は法嗣を探すために、「西方」つまりインドを離れ、「東土」つまり中国まで渡ったが、相應しい後継者は慧可のみであった。達磨は慧可に向かつて「法は沙界に周すらん」と述べてから、「一華開五葉 結果自然成」と禪宗の宿命を予期する。この逸話を引用する仏光国師の詩では蓮華が桜にな

り、夢窓がその師祖の詩を以て、達磨の予見を西芳寺の桜に適用した。ここには、禪宗にとって西芳寺が運命的な、いわば約束の地であるとの主張が見られる。これに、真如親王における仏法の盛りの花の記憶を付け加えてもよいかもしれない。このように、仏教の歴史上最も重要な人物との関わりを誇る西芳寺の桜は、禪宗史の中に確たる位置づけを得るのである。

おわりに

本稿では、従来の研究において指摘されてこなかった、西芳寺の桜の象徴的な役割について考察してきた。諸史料によると、この桜は種々に描写され、意味付けられていた。しかし、そのすべてがそれぞれ過去、現在、未来を密接に結び付けながら、西芳寺の繁栄を祈念するものであった。たとえば『西芳精舎縁起』では、桜が皇室と武家、そして高僧と西芳寺に興隆する仏法との接点として描かれている。また、『正覚国師和歌集』の桜に関する和歌は、迫り来る夢窓の死を予感させながらも、一方で、武家と皇室の保護による西芳寺の末永い栄華の象徴ともなっていた。最後に『年譜』では、真如親王の植えた桜が仏光国師、さらには禪宗開祖である達磨の予言とも重ねられることよって、禪宗が西芳寺に受容されることの必然性と、西芳寺が禪宗の歴史において重要な地位を築くことが表現されていた。以上、多くの史料に見られたように、禪宗は西芳寺に

おいて日本の風土に根を下ろし、同時に西芳寺はそこで禅宗史に接ぎ木されたと言えよう。

謝辞

本研究は、国際日本文化研究センターの末木文美士教授に賜った有益な御助言と、当センター主催「日本宗教史基礎研究」参加者の方々に頂いたご意見を参考にさせていただいており、この場を借りて御学恩に深く感謝いたします。なお、本稿は二〇一一年第十六回国際仏教学会（於…法鼓仏教学院台湾）における英語での口頭発表をもとに加筆・訂正したものです。発表の折にも、多くの方々より貴重な質問やコメントを頂きましたこと、心より御礼申し上げます。

註

- (1) 各学説が、梅沢篤之介「枯山水の研究」西芳寺洪隠山 枯山水の作者及びその作庭年代について『造園雑誌』二三巻四号、一九六〇年、一—四項に所収されている。
- (2) 高橋桃子「中世西芳寺の歴史と庭園観」佐伯有清編『日本古代中世の政治と文化』吉川弘文館、一九九七年、三七〇—三七四頁。
- (3) 「西芳精舎縁起」鷺尾順敬編『國文東方佛教叢書』第二輯第六卷、名著普及会、一九二七年、二六一—二七四頁。

- (4) 前掲(3)、二六六—二六七頁。
- (5) 前掲(3)、二六七—二六八頁。
- (6) 前掲(3)、二六八頁。
- (7) 前掲(3)、二六九頁。
- (8) 前掲(3)。
- (9) 「正国師集」新編国歌大観編集委員会編『新編国歌大観』第七卷、私家集編Ⅲ歌集、角川書店、一九八九年、七〇四—七〇六頁。
- (10) 前掲(9)、歌番号一七。
- (11) 前掲(9)、歌番号九。
- (12) 足利直義。
- (13) 前掲(9)、歌番号一一。
- (14) 足利尊氏。
- (15) 時期は未詳。
- (16) 前掲(9)、歌番号一五。
- (17) 原文に間違いがあると推測される。夢窓は観応二年(二三五)九月三十日に他界するので、訂正が必要である。『園大暦』によると、この訪問は観応二年三月二十一日に行われた。また、同書は、尊氏の訪問も記録している。『園大暦』巻三、続群書類従完成会、一九七一年、四三九頁。
- (18) 足利義詮。
- (19) 前掲(9)、歌番号三三。
- (20) 時期など詳細不明。
- (21) 前掲(9)、歌番号一〇。
- (22) 貞和五年(一三四九)三月二十六日か。『園大暦』によると、この日

光明上皇（一三二一—一三八〇）は天龍寺への御幸の後、西芳寺にも参拝したという記事があり、当時の右大臣である西園寺公重（一三一七—一三六七）、つまり竹林院内大臣も天龍寺の御幸に参加したと記載されている。前掲（17）、五〇—五二頁。

（23）前掲（9）、歌番号一九・二〇。

（24）前掲（9）、歌番号一七。

（25）歌番号七四七、「古今和歌集」新編国歌大観編集委員会編『新編国歌大観』第一巻、勅撰集I歌集、角川書店、一九八九年、二四頁。

（26）前掲（9）、歌番号三六。

（27）前掲（9）、歌番号三七。

（28）「天竜開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜」一切経刊行会『大正新修大蔵経』第八〇巻、一九二八年、四八二—四九八頁。

（29）前掲（28）、四八九頁。

（30）前掲（28）。

（31）「仏光国師語録」一切経刊行会『大正新修大蔵経』第八〇巻、一九二八年、二三二頁。

（32）「景德伝灯録」巻三、一切経刊行会『大正新修大蔵経』第五一巻、一九二八年、二一九頁。